

ISSN 2186 – 3989

学部の英語教育に e ラーニングを
効果的に取り入れる工夫
－新学部での取り組み－

階戸 陽太

The Effective Effort to Introduce e-learning System into English
Education in Faculty: A Challenge in the New Faculty

Yota Shinato

北 陸 大 学 紀 要
第49号(2020年9月)抜刷

学部 of 英語教育に e ラーニングを 効果的に取り入れる工夫 —新学部での取り組み—

階戸 陽太*

The Effective Effort to Introduce e-learning System into English
Education in Faculty: A Challenge in the New Faculty

Yota Shinato*

Received June 22, 2020

Abstract

This paper aims to report effective efforts to introduce e-learning System into English education in the new faculty, Faculty of International Communication. E-learning system, Super Eigo, has been introduced since 2017. All of the students study e-learning as an assignment for one of the English subjects. The assignments are set by using the scale of mileage which is given according to the achievement of the learning or activity time on the system. In 2019, a Sales representative who was one of the developers was invited to explain Super Eigo. The aim of invitation was for the students' better understanding of the system and their autonomous learning. The session was set in the beginning of the fall semester 2019. All English major students from 2nd year and 3rd year listened to the sales person in the class which the e-learning was assigned in. The effect of this effort was examined by the analysis of the data of the e-learning, TOEIC Listening and Reading score and the students' reflection of the class. According to the result, the talk of the sales person was motivated students. However, the result of TOEIC L&R showed the necessity of improvement.

Key words : e-learning, outside-class assignment, TOEIC

1. はじめに

本稿は、新学部の英語教育に e ラーニングを効果的に取り入れるための取り組みについて報告することを目的としている。特に 2019 年の e ラーニングの取り組みに焦点を当て、説明会の効果について、学習時間、TOEIC の結果、学生の振り返りをもとに考察を行う。

2. 先行研究・事例と背景

2.1 先行研究・事例

多くの大学で e ラーニングを導入している。授業内で e ラーニングを課す大学もあれば、授業外での課題として取り入れている大学もある。

渡辺・青木（2011）は、広島市立大学で、「CALL 英語集中 I」という授業で e ラーニングを授業内と授業外で取り入れた結果について報告している。この中で、TOEIC の伸びが大きい学習者は、教材の消化率がより高く、学習時間もより長い、としている。しかし、学生にどうやって意欲的に取り組ませるかは、課題であると指摘している。

一方、松本大学では、入学前から e ラーニングを課し、入学後も初年次教育として英語教育を設定し、英語授業と関連させて、TOEIC 対策へつなげている。（上條, 2019）実際の評価としては、TOEIC Bridge を活用している。松本大学の特徴は、e ラーニングの管理を教員と事務職員が協働で行っていることである。この取り組みによって、TOEIC Bridge の平均スコアは伸びてきていると報告している。筆者の勤務校では、入学前から松本大学同様に、e ラーニングを課題として課しているが、管理は教員が行っている。

2.2 背景

筆者が勤務する大学では、2017 年に新学部、国際コミュニケーション学部が設置された。英語教育に重点を置き、1、2 年生で英語力を磨き、3、4 年生で培った英語力を生かしながら、専門領域を学ぶことを目指している。

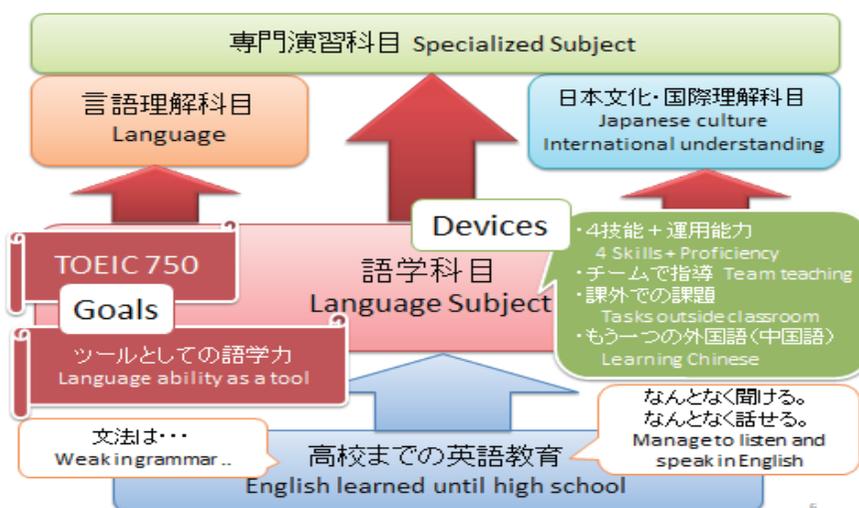


図 1 新学部のコンセプトイメージ

高校までの英語教育を踏まえて、英語運用能力に重点を置き、6つの英語科目を1、2年次に設定し、学生が英語に触れる時間を確保している。さらに、課外での課題としてeラーニング、Language Loungeでのイベントに参加を課すことによって、日常的に英語に触れるような仕組みを作っている。ツールとしての語学力の育成を目指すとともに、数値目標として、卒業までにTOEICスコア750を目指すことにしている。図1が新学部のコンセプトイメージである。

週6つの英語科目は、4技能に特化した科目4つと、英語の運用面に焦点を当てた科目2つである。1年生での4技能に特化した科目はBasic Listening、Basic Speaking、Basic Reading、Basic Writingという授業で、運用面に焦点を当てた2科目は、Basic Presentation & DiscussionとBasic Grammarという授業である。2年生でも「Advanced」として、同様の科目構成を設定している。3、4年生では、専門科目に重点を置くため、英語科目は2科目ずつになる。日本人教員が担当するのは資格英語、ネイティブ教員が担当するのはPractical Communicationとなる。図2が英語科目のイメージである。

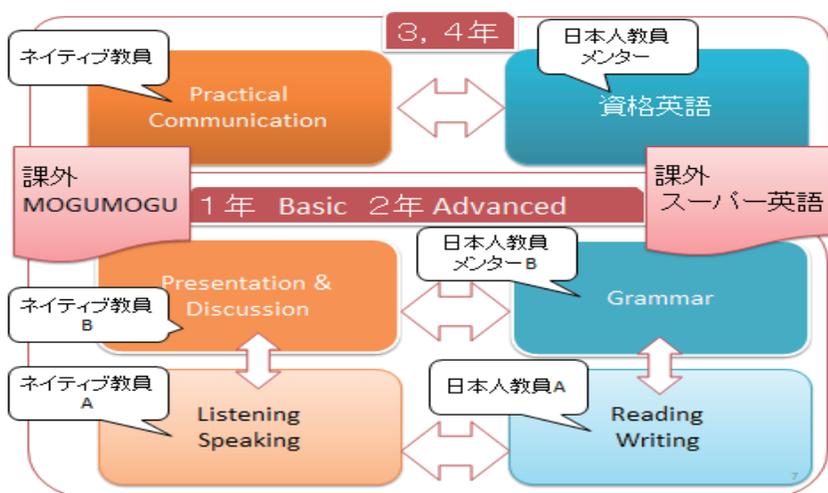


図2 英語科目のイメージ

3. eラーニングの導入

3.1 目的と授業科目

科目設定や指導体制だけでなく、英語力育成を図るため、課外での学習機会を設けることを目的に、eラーニングを導入している。エル・インターフェイスのAcademic Express 3（スーパー英語）を使用している。特徴は、学習管理の工夫にある。学習の成果を学習マイル、学習継続メダルといった形で見える形で表していることが挙げられる。図1は学生画面、図2は管理者画面になる。

このeラーニングを、授業の課外学習と位置づけ、英語科目の成績評価の一部として取り組ませている。一定の基準を設けて、必ずeラーニングに取り組むように仕向けている。

日本人教員が担当する Basic Grammar (1年)、Advanced Grammar (2年)、資格英語 (3,4年) に組み込んでいる。これらの科目では、教員がメンターとして、英語学習についてアドバイスをすることになっている。この一環として、eラーニングの取り組みについても、管理し、学生の取り組みを促していく。

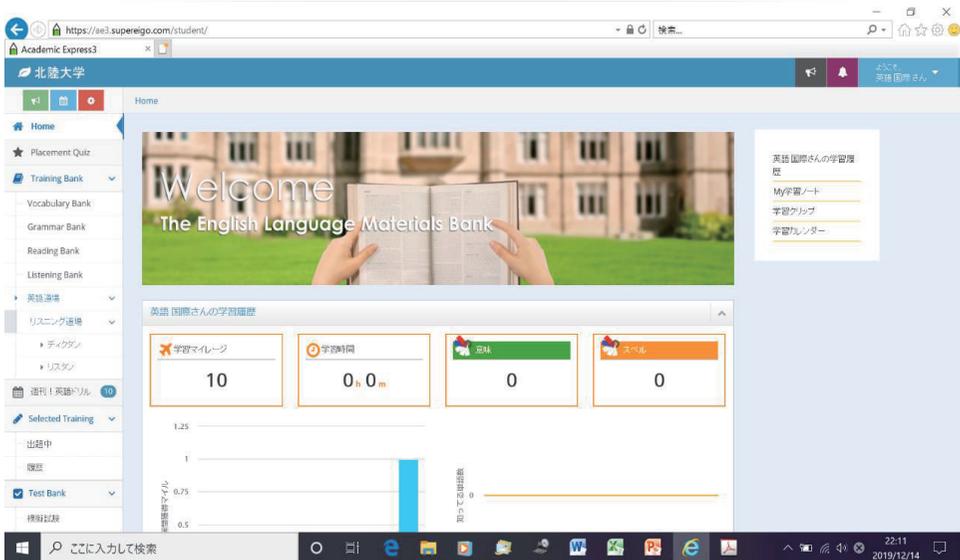


図 1 学生画面

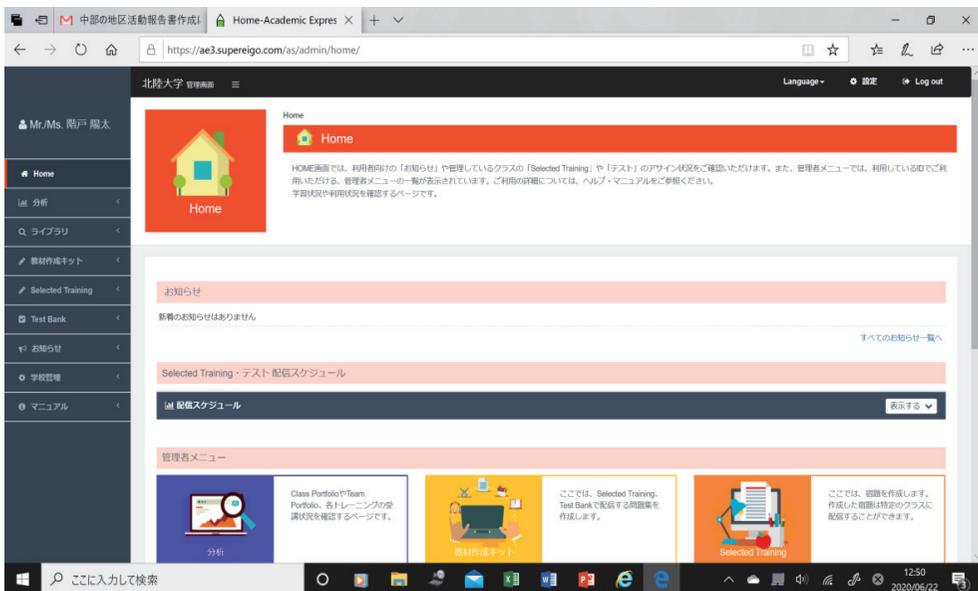


図 2 管理者画面

3.2 成績評価（2019年）

授業の評価として、2019年は以下のような基準を設定した。

表1 スーパー英語評価基準（2019年）

	週課題	月課題
1年	Selected Training の設定	学習マイル 1,000マイル
2年	なし	学習時間 5時間
3年	なし	学習時間 5時間

※2019年は、学部設置3年目のため、3年生までが在籍。

2017年の導入当初は、学習マイルを基準にしていたが、2年生以上は学習時間を基準とした。その意図は、学生自身に考えさせながら、継続的に取り組むようにさせたいためである。また、マイルでは、月末に固めてやる学生が多かったため、時間を基準にすることで、毎日少しずつ取り組ませるようにすることを目指していた。1年生では、教員側で問題を設定する Selected Training を週の課題として設定していたが、2年生以上ではより自由に取り組ませたいために、月の課題だけとした。

担当教員は、学生の進捗状況を確認し、声掛けを行っていく。

3.3 説明会の実施

2019年後期の開始に合わせて、eラーニングを運営するエル・インターフェイスの営業担当の方（開発にも携わっている）に、2年生以上の学生を対象として直接説明していただく機会を設定した。学生のeラーニングへの取り組みをより効果的なものにしたという意図があった。2年生以上で、自主的な取り組みを進めて、継続的に取り組むような仕組みに変更したが、前期の取り組みには改善の余地があると判断した。

説明会は、授業時間内に全員を集め、1時間程度時間を取った。営業担当の方には、前述の意図を説明し、基本的には、内容を委任する形をとった。開発の裏話、利用法、実際の効果について、といった内容になった。最後に、質疑応答の時間も設けた。

表2 スーパー英語説明会

	人数	日	実施回
Advanced Grammar II (2年)	38名	2019年9月19日	第1回
資格英語 (3年)	60名	2019年10月1日	第2回

この説明会の中で、営業担当の方から、これまでの大学生の利用状況の傾向から、月の学習時間が5時間から効果が表れるという話があった。この話を以前から聞いていたため、2年生以上で、月目標を5時間と学習時間を設定した。この5時間を実現するためには、

1日の学習時間を考えると、10分ほどになる。(月の学習時間を分に換算すると、5時間×60分=300分。1日あたりは、300分÷30日=10分となる)

4. 説明会の効果

4.1 分析方法

後期に実施したeラーニング説明会の効果について検証する。対象は、2年生と3年生の両学年を担当した筆者と、もう一人の教員のクラス、2クラスとする。この2クラスにする理由は、学生の振り返りの情報がそろっていたためであること、また、2年生は2クラスだけだったため、3年生のクラスをそろえるためである。分析は、スーパー英語の学習時間、学年末に行ったTOEIC Listening & Reading (以下TOEIC L&R)の結果、授業での学生の振り返りを用いる。

対象とするクラスの情報は表3のとおりである。

表3 分析対象クラス

クラス	教員	人数
Advanced Grammar II A クラス	A	18名
Advanced Grammar II B クラス	筆者	20名
資格英語 II B クラス	A	13名
資格英語 II C クラス	筆者	16名

説明会を挟んで、対象学生(67名)の前期と後期のスーパー英語への取り組みを比較する。

4.2 学習時間

対象クラスのスーパー英語への取り組みを学習時間で分析を行う。

表4は前期と後期の学習時間を比較したものである。

表4 学習時間のクラス平均比較

	前期 4月～7月	後期 10月～1月	時間増減
Advanced Grammar II A	13:20	11:07	△2:13
Advanced Grammar II B	13:11	16:51	3:39
資格英語 I B	14:33	16:11	1:38
資格英語 I C	16:21	14:58	△1:23

※△は減。

学習時間について、前期と後期の平均を比較すると、2年Bクラス、3年Bクラスで増加し、2年Aクラス、3年Cクラスで減少した。4クラス全体では、1:41の増加となった。

個別の学習時間数の増減は、37名が増加した。対象67名のおよそ55%が増加したことになる。

4.3 TOEIC Listening & Reading

2年生以上は各学期末に、評価の一部として TOEIC L&R の受験を課している。スーパー英語の説明会を行ったクラスごとの後期の伸びと1年間の伸びを比較する。表5はクラスごとの TOEIC L&R の平均スコアを示している。表6は、前年度からのスコアの伸びを、1年間と後期とに分けて示したものである。

表5 TOEIC L&R クラス平均比較

	2018年度後期末	2019年度前期末	2019年度後期末
Advanced Grammar II A	399	492	485
Advanced Grammar II B	423	449	501
資格英語 I B	488	539	532
資格英語 I C	445	505	541
全体 (4クラス)	439	496	515

表6 TOEIC L&R 伸び (クラス平均)

	伸び 1年	伸び 後期
Advanced Grammar II A	128	△8
Advanced Grammar II B	29	3
資格英語 I B	44	△7
資格英語 I C	125	36
全体 (4クラス)	82	6

※△は減。

各クラス、年間を通した TOEIC L&R のスコアは伸びていることがわかる。年間を通したクラス平均点の伸びは、82点となった。後期では、6点となった。

4.4 学習時間と TOEIC L&R の関係

表4と表6から学習時間と TOEIC L&R の関係を分析する。年間を通して学習時間が多かったのは、2年生ではBクラス(前期13:11、後期16:51)、3年生ではCクラス(前期16:21、後期14:58)となる。一方、TOEIC L&R の1年間の伸びは、2年生ではBクラス(128)、3年生ではCクラス(125)が大きかった。後期に関しても、2年生ではBクラス、3年生ではCクラスの学習時間が多くなったが、TOEIC L&R についても同様に2年生ではBクラス、3年生ではCクラスのスコアが伸びていた。このように、学習時間と TOEIC L&R の関係性については、規則性はなかった。

個人について、学習時間と TOEIC L&R の関係を分析したものが表 7 になる。月 5 時間という目標を設定していたため、4 か月では 20 時間となる。後期の学習時間が 20 時間を超えた学生は 4 クラスで 7 名となった。TOEIC L&R の伸びについてみると、1 年間では 7 名中 6 名がスコアを伸ばした。平均では 112 点の伸びとなった。後期では、7 名中 5 名がスコアを伸ばした。平均では 33 点の伸びとなった。

表 7 後期学習時間 20 時間以上の学生の TOEIC L&R の伸び

	学生	後期 学習時間	TOEIC L&R 伸び 1 年	TOEIC L&R 伸び 後期
1	2B1	20:34	60	10
2	3B1	20:27	265	15
3	3B2	20:24	95	△40
4	2B2	20:16	165	55
5	2B3	20:10	45	140
6	2B4	20:08	△50	△20
7	2B5	20:06	205	70

※△は減。

5. 考察

5.1 振り返りからの考察

後期の学習時間が多かったのは、2 年生では B クラス（後期 16:51）、3 年生では B クラス（後期 16:11）であった。この 2 クラスを中心に、説明会があった回の授業の振り返りをもとに考察していく。

振り返りを内容ごとにラベリングをし、カテゴリーに分類した。3 年 B クラスでは、《スーパー英語への気づき》、《目標設定》というカテゴリーができた。具体的な学生の言葉を挙げていく。

《スーパー英語への気づき》

「驚き」

今までに気にせず使っていたスーパー英語がすごく考えられていることを知ってびっくりしました。(3B 08)

思った以上に考えられて作ったものだと驚きました。(3B 07)

「継続」

毎日継続して使っていくことが大事だとわかった。(3B 08)

「自覚」

ちゃんとスーパーエイゴをやろうと思いました。(3B 04)

「学習時間」

英語の点数を上げるために、多くの学習時間が必要なことがわかりました。(3B 03)

《目標設定》

「触れる」

1日少しでもスーパー英語に触れるようにしたいです。(3B 01)

「継続」

毎日15分継続していこうと思いました。(3B 03)

毎日コツコツやっていこうと思いました。(3B 011)

「バランス」

均等にできるように。(3B 05)

「意識すること」

コツコツするのが苦手なのですが、意識してやっていきたいです。(3B 06)

説明会によって、開発者側の思いを知り、「驚き」を感じ、やることの大切さを「自覚」し、「学習時間」「継続」の大切さが《スーパー英語への気づき》として、表れていた。さらに具体的な《目標設定》として、スーパー英語に毎日「触れる」、「継続」する、「意識」してやることを挙げていた。

一方、2年Bクラスでは、《スーパー英語への理解》、《目標設定》というカテゴリができた。具体的な学生の言葉を挙げていく。

《スーパー英語への理解》

「活用」

スーパー英語の有効活用法を学んだ。(2B 05)

スーパー英語をより活用できる方法がわかった。(2B 06)

「使い方」

スーパー英語の使い方について学んだ。(2B 07)

スーパー英語の使い方がより分かった。(2B 013)

「しくみ」

スーパー英語のしくみについて、いろいろ知れました。(2B 012)

《目標設定》

「計画性」

後期からは、計画性を持ってスーパー英語に取り組んでいきたいです。(2B 010)

「継続」

毎日コツコツ頑張ります。(2B 01)

スーパー英語を継続していきます。(2B02)

「有効利用」

有効利用して力をつけたいと感じた。(2B 011)

「決意」

スーパー英語を頑張ろうと思いました。(2B 03)

スーパー英語、頑張ります。(2B 014)

説明会によって、「使い方」、「しくみ」を知り、「活用」方法が《スーパー英語への気づき》として、表れていた。さらに具体的な《目標設定》として、「計画性」、「有効利用」すること、「決意」を挙げていた。

このように、この2クラスには、説明会の効果が後期の学習時間となって表れたと考える。

5.2 スーパー英語と TOEIC 結果の考察

表4と表6から学習時間と TOEIC L&R の結果の分析から、規則性はなかった。しかし、月5時間を達成した学生の TOEIC L&R の結果は、1年間では7名中6名がスコアを伸ばした。平均では112点の伸びとなった。後期では、7名中5名がスコアを伸ばした。平均では33点となった。渡辺・青木(2011)が指摘するように、スーパー英語の取り組みがよければ、TOEIC L&R の結果に、プラスに作用すると考えられる。

後期に関して、全体的に伸びは少なかった。考えられる要因は、2つ考えられる。一つは、年末・年始があったことである。3年生については、年明けの1月12日の公開テストを受験した。意欲の面で低調な状態で受験をした可能性がある。二つ目は、受験形態である。2年生については、団体特別受験制度(IP: Institutional Program、以下IPテスト)を利用した。公開テストとは違い、緊張感を欠いた可能性がある。また、時期的な問題で、受験日を後期期末試験が終了した2月に設定したことも、緊張感を欠く要因になった可能性がある。前期は2、3年生とも公開テストを受験した。

今後の課題として、次の2つを挙げることができる。一つはスーパー英語の取り組みで、月5時間以上を、どのようにして促していくかである。前述のように、月5時間以上を達成した学生の TOEIC スコアは伸びていた。しかし、今回対象とした、4クラスでは、67名中わずか7名だった。自主的な取り組みを促すことを目的に、2、3年生に関しては、週課題を設定しなかった。このため、月末に一気に月課題の5時間を達成しようとする学生がほとんどだった。細かい目標設定をする必要がある。一方、上條(2019)の指摘したよ

うに事務職員との協働で、学生の取り組みを見ていくことも検討する余地があると考ええる。

二つ目は、TOEIC L&R の受験日の設定、形式の問題をどうしていくか、である。授業の評価の一部としているため、学期末に設定したいところである。公開テストにすると、成績処理の関係上、期末試験期間より早まることがあり得る。一方、IP テストでは、日程は調整できるものの、緊張感を欠いてしまう可能性がある。学生のモチベーションという視点で、検討していかなければならない課題である。

6. まとめ

課外で e ラーニングを取り入れていく取り組みを新学部設置以降、続けている。毎年、学生の取り組みの実態を見ながら、基準を変更している。効果的に取り入れることは、今後も課題として考えていかなければならない。

2019 年度の取り組みを踏まえて、2020 年度は、2 年生以上については、5 時間以上という月目標は維持し、週課題を設定し、毎日 10 分以上取り組む基準を設定することにしている。また、取り組みを促す指導方法についても考えていきたい。

引用文献

- 上條直哉（2019）「教職員が連携したディプロマポリシー達成のための英語教育カリキュラムマネジメントの目的と効果」「学生の将来を後押しする大学の取り組み～TOEIC Bridge®を活用した英語教育の仕組みづくり」（2019 年度 TOEIC®セミナー2019 年 9 月 14 日）資料
- 渡辺智恵・青木信之（2011）「英語 e ラーニングの効果：TOEIC の伸びからみた教材消化率、不適切学習発生率」『広島国際研究』 17、 105-119.